

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 11 月 4 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520834

研究課題名(和文)中世ブリテン史における貨幣製造人の「世界」 - C. 973年～1279年 -

研究課題名(英文)The moneyers in medieval Britain from c. 973-1279

研究代表者

鶴島 博和 (Tsurushima, Hirokazu)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：20188642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーロッパ中世世界はながらく貨幣流通が最小限度の「自然経済」の社会といわれてきた。しかし現在ではそこに貨幣経済とはいわないまでも活発な市場経済と貨幣の流通をみる。そのなかで、973年頃から1279年頃までのイングランドにおける貨幣システムは、きわめて特異である。錢貨のローマ帝國的イメージ、王国内における王権による単一錢貨の流通規制と定期的な型の変更、多くの貨幣製造場と製造人の活動、高品質で統制のとれた品位と重量などは、銀のとれないイングランドにおける王権の強さの象徴とされてきた。しかし、地域社会の名望家である貨幣製造人が作り出す信頼が品位と王権の権威と連動して流通を可能としたのである。

研究成果の概要(英文)：The European medieval world had been regarded as that of natural economy for a long time. However, now nobody cannot deny the activity of market economy and of monetary circulation. In particular, England, from c. 973 to c. 1279, is said to have occupied the peculiar place in the European monetary system. We can see the imperial images of the coin, the king's legal money that which could be only circulate within the kingdom, excluding or reminting the foreign coins, the regular innovation and reminting of coins in a short time, the active production of local mints and moneyers, and high quality and relative stable weight of coins. These have been thought of as landmark of strong kingship in England which had hardly produced silver ore in that time. However, with king's powers and authority and high quality of coin, it was the moneyers who made their coins circulated with smooth. It was their reliance as local figures that gave them credit of currency.

研究分野：イングランド中世史

 キーワード：貨幣money 錢貨coin 通貨currency 中世イングランド 銀貨silver penny 錢貨改定 錢貨製造人
 錢貨製造場

1. 研究開始当初の背景

研究史的背景

貨幣 (money) は、もの、文字、図像として、豊かな情報を提供してくれる貴重な史料である。しかし貨幣という人間生活における特殊な役割と複雑性ゆえに、その解釈には特殊な技能が必要とされ、貨幣史研究者 (numismatist) という一般の歴史とは異なる研究領域を生んできた。しかし、とくに今世紀に入ってから、一般の歴史家も貨幣を積極的に利用した研究を行い、貨幣史研究者も歴史学プロパへの接近を行い、両者の融合が進んでいる。しかし、日本においては、ヨーロッパ貨幣史の研究史の紹介研究は行われてきたが、貨幣そのものを扱った研究はまだ十分とはいえない、いわば研究の黎明期にある状況である。

イギリスの古銭学は古い伝統と深い研究蓄積を有している。銭貨 (coin) の形態、銭貨製造場 (mint) や銭貨製造人 (moneyer) 間における打型 (die) の関係、銭貨の重さと大きさの変遷 (品質の研究は十分とはいえないが) 膨大な量の銭貨製造人についての研究には眼をみはるものがある。P. Grierson や R. H. M. Dolley の古典的研究や、今だに有効な *Catalogue of English Coins in the British Museum* といった一連の研究に枚挙のいとまがない。最近では、C. E. Challis (ed.), *A New History of the Royal Mint* (1992) 所収の Ian Stewart と N. J. Mayhew の論文が包括的である。しかし、その一方で、イギリスの古銭学者は、時代的に 1066 年を画期として描く傾向にあり、1066 年を超えた長い時間軸での研究成果は少ない。1279 年までを扱った H. R. Mossop, *The Lincoln Mint c. 890-1279* (1970) や、J. North, *English Hammered Coinage c. 600-1272* (1994) は、銭貨の形態、打型の関係に焦点をあてたものではあるが、銭貨製造人に関しては不完全なリストしかない。後述するが、973 年のエドガ王の銭貨改革が、12 世紀後半のヘンリ 2 世の改革まで、イングランドにおける貨幣システム (monetary system) の根幹を作り、影響を与え続けたとすれば、1066 年を画期とする根拠はまったく存在しないのである。今必要なのは、1066 年を超えたより幅広い時間軸での研究なのである。

現代の貨幣史研究の水準を定めたといも言える D. M. Metcalf, *An Atlas of Anglo-Saxon and Norman Coin Finds*, c. 973-1086 や M. Blackburn の膨大な研究は、個別発見貨中心とした経済史に焦点を置いていて、銭貨製造人の「世界」十分に切り込むことはしていない。この点に、銭貨製造人を単なる量としてでなく、その政治、経済的地位だけではなく家系や隣人間関係という社会生活や技術伝承など、広義の生活史の視点から検討していく余地が残されている。

日本においては、古典的作品に依拠した

戸上『イングランド初期貨幣史の研究』、スティーブン治世における王権による銭貨製造権の保持を扱った吉武憲司の論文、ブラックバーンに依拠しつつ大陸の所領経営との関連を視野にいたした森本芳樹の研究、バンベルク司教座を中心とした計算貨幣への意欲的取り組みもあるが、まだその途についたばかりである。社会経済史の基本とも言うべき貨幣史の研究に蓄積がないのは、研究における大きな欠陥であろう。

銭貨製造人に関しては、たしかに、P. Nightingale ('some London moneyers and reflections on the organization of English mints in the eleventh and twelfth centuries', *Numismatic Chronicles* 142, 34-56) のロンドンの銭貨製造人の研究は、製造人の社会に深く切り込んだ秀逸な研究である。しかし、銭貨製造人の「世界」が全体として描かれたとはいえないのである。C. Keats-Rohan のプロソポグラフィカルなデータベース (便利ではあるが名前のリストでしかなく遺漏も多い) は存在するが、歴史的文脈での使用には難しいものがある。銭貨製造人が、先駆的な法定貨の製造に活躍した時代の世界とその活動を、ブリテンと北海世界におけるイングランド王国の先駆的「スターリング体制」論の視点から活写した研究はイギリスにおいてもないのである。いな、973 年から 1279 年の全体的なリストも存在していない。

鶴島はこれまで、960 年代から 1130 年代までを対処に、地域の名望家 (ジェントリ) の存在形態と海域からの歴史の書き直しに関する研究を行ってきた。その研究過程で、名望家の中に多くの銭貨造幣人の存在を確認したし (いくつかは鶴島のオリジナルな発見) また海港都市間での銭貨幣造幣人の船を使用しての移動の事例を見いだしてきた。鶴島は、銭貨製造人という職の重要性にも関わらず、まだ必ずしも最終的に、職が社会的にかつ排他的に専門化していない時代 (1279 年以前) の彼らの「世界」を、イングランドを中心とするブリテン諸地域の社会的・政治的・国制的・経済的・文化的な「構造」のなかで探求したいと考えようになった。これが研究史から導き出された本研究の前提 (背景) である。

理解の前提

10 世紀までにキリスト教的皇帝理念によって統合された中世イングランド王国は、ラテン的キリスト教ヨーロッパ世界のいわゆる「封建社会」において、極めて特異な集権的統治構造を有するようになったと言われてきた。カロリング的な戴冠式を 973 年にバースで挙行し、その統合王権の確立を示す象徴的存在と言われるエドガ王は、同じ時期に貨幣改革を断行した。カロリング的銀貨が、表に王の組み合わせ文字とミントの名称を打刻するのに対して (図 1)

イングランドのそれは表に一貫して王の肖像と称号を、裏面に十字と銭貨製造人の名前と銭貨製造場(mint)の名前を刻印するのを特徴とした(図2)。この様式は1279年のエドワード一世による変革によって製造人が刻印されなくなるまで続いた。973年の改革は、銭貨のデザインとその打型を王権が独占し、かつ短期間(2年から6年の間)で型を交換し、イングランドに於いて、国王銭貨以外の流通を禁じたものである。短期間で打型交換はヘンリ2世の1158年の改革で廃止されたが、型の独占は壊れることはなかった。

国王大権の基盤ともいえる銭貨製造権は、大陸においては国王の独占体制が地域諸権力(諸侯)に分有されていたのに対して、イングランド王権は先駆的な法定通貨を発行し続けたのである。従って、イングランドに、大陸の社会構造をモデルにして18世紀に構築された「封建制」概念は、イングランドには適用できない、地域的分析モデルなのである。

図1は、フランク王国のカール・マルテルのもので、中心にKarolusのK-R-L-S裏に十字と支配者の名Charles Martelとある。図2は1029年から35年まで使用されたクヌート王の短十字タイプで表に+Cnut Rex A、裏に+Leofwine on Doverとある。



図1 カール・マルテルのペニー貨

図2 クヌート、短十字タイプペニー貨

このイングランドの様式は、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」(「マルコによ

る福音書」12:13-17)というキリストの言葉が伝えるように、ローマ帝国のデナリウス貨を強く意識したものであった。表の肖像は、エセルレッド二世(978-1016年)の時期には出現する令状と同じく、王の現存を意識させる役割を果たしていた。

エセルレッド二世(979-1016年)やクヌート(1016-35年)の法典は銭貨製造の指針であるが、驚くべきことは、それらが国王の命令として一定の効力をもっていたことである。とくに、銀貨の品質保証と国王の銭貨以外の国内における流通禁止は基本的に遵守されていた。鶴島は、科学研究の当初に、自身のコレクションの一部をサンプルとして別府大学の協力をえて蛍光X線分析方法(X-ray fluorescence method)による銀含有量を調査した。その結果は、概ねスターリング貨の純度92.5%を超えた高品位を示したのに対して、レオン・カステリアのアルフォンソ8世の貨幣の銀含有率は25%程度にすぎなかった。R. Britnell, *Britain and Ireland 1050-1530* (2004)も、当時の銀貨の品位はスターリング基準を超えると推定している。イングランド王権が品位を維持したことは、大陸諸国が財政危機のさいに品位の低下をもって対応したのとは大きな違いを示している。これは単なる通貨政策の差ではなく、マルク・ブロック的な「封建制社会」概念では説明できないヨーロッパ世界の半周辺地帯の「小帝国」構造の根幹をなすイングランドの特質なのである。イングランド国王の銀貨は、ちょうど近代においてマリア・テレジア銀貨が中東で受容されたように(黒田明伸『貨幣システムの世界史』(2003年)その高品質故に受容され、基準通貨としてブリテンおよび北海諸地域で広く流通したのである。それゆえ、財政難で品位を落とすことは、王国の危機を加速させる事態で避けなければならないことであった。その強靱さ故に、スコットランド王国は、12世紀以降王国としての自立性を求めるイングランドとの戦いのなかにおいてさえ、イングランド型の通貨を発行し続けなければならなかったのである。そして、その安定さ故に、周辺諸国はイングランドペニーを疑似基準貨として使用、あるいは模倣や模造を行ったのである。

2. 研究の目的

イングランドの王権は、973年からペニー銀貨のデザインと打型と重量基準そして品位を独占し、先駆的な高品質の法定貨の発行を実現した。王権は、銭貨による貨幣発行という大権を諸侯に分有されることなく保持し、銭貨製造人を強力に統制することができたのである。本研究の目的は、973年から1279年までのイングランドを主たる対象として、この貨幣製造人の家族、集団、地域、身分、その仕事や職務といった

様々な社会的・経済的・政治的諸関係の総体としての「世界」を、まず製造人のデータベースを相互連関的方法論を用いて作成し、それをを用いて彼らの「存在」解明し、銀貨の製造と発行という「国家的」支配の基底から中世イングランド王権が持っていたヨーロッパ史における集権権的「帝国」構造の一端を照射することにある。

3. 研究の方法

1) 973年から1273年までの、インランドの全銭貨製造場における銭貨造幣人のデータ・ベースを作成する。これほど長期で広範な時空間をカバーするリストは現在存在しない。このデータ・ベースをもとに、下記の方法論に従って、銭貨造幣人を類型化し、その家系、国王と諸侯と地域共同体との関係を解明する。

2) 銭貨製造場とはヘンリー2世の1180年の改革によって「銭貨両替作業」と「銭貨製造作業」が分離するまで、打型を国王政府から受け取り、銭貨の品質に責任をもつ独立した親方である銭貨製造人を中心とした人間集団を意味し、特定の作業所を意味するわけではなかった。改革以後、銭貨製造場は作業所としての性格を獲得する。これに伴い11世紀後半から進行していた銭貨造幣人の都市市民化の方向は定まり、市場の傍や都市中枢部に銭貨製造場が常設の作業所として建てられるようになった。その市民化の過程、銭貨製造場の位置等を、同定あるいは確認する。

3) イングランドと他地域との相互依存的な諸関係の網の目とその構造的変化を明らかにする。

本研究は、貨幣史研究において、従来銭貨の機能論や経済史的な流通、あるいは王権の貨幣政策に焦点が置かれていた議論を、聖人伝等、これまで古銭学者が使用してこなかった史料を使用して、イギリスや日本の歴史学界に欠落していた、銭貨製造人の社会的関係やその流動性といった「世界」を、構造論的な社会史(あるいは広義の「生活史」)という視点から解明し、これによってイギリスの中世史学界に新たな観点を獲得しようという意志と目的によって立案されたものである。

4. 研究成果

銭貨製造人のデータベースの構築を行ってきたが、処理すべきデータの量が多く依然として継続中であり、公開にはいたっていない。現在も同様の科学研究の代表でもあり、できるだけ早い時期に完成させたい。

1) データベース。

現在二つのデータベースを構築中である。ひとつは、973年頃から1279年までのイングランドにおけるすべての銭貨製造人のデータベースであり、もうひとつは銭貨そのもののデータベースである。銭貨製造人の

データベースは以下の項目を設定している。

番号、 氏名、 家系番号、 家系、 銭貨タイプ、 銭貨関係(銭貨のデータベースとのリレーション)、 期間、 打型関係、 社会層、 史料(他の文献史料)。この設定は、銭貨分析のための、プロソポグラフィカル、打型関係(die-links method)、素材と銀の含有量(X-ray fluorescence method)、銭貨の大きさと重量という四つの分析方法と関連している。銭貨のデータベースは、2016年度から継続した科研費研究(A)「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」(代表鶴島博和)で、西ユーラシアレベルの銭貨の型のデータベースと関連させたものとなり、個人での実行が不可能なほど巨大なものとなり、現在構築中である。

ここに事例として、973年から1135年までのケント州の製造人(約220名)のリストと、そのすべての個別発見化(242例)に関するデータベースの例を挙げた。



図3 Sired のデータ

表 カンタベリの銭貨製造人(一部)

Table with 20 rows (names: Canterbury, Agemund, Alfred, Aiger, Algod, Almyc, allef, edric, egor, egelic, egelwine, eglwine, eflred, efnad) and 20 columns of binary data (1s and 0s).

具体的なデータの取得方法は以下の通りである。

1. 文献による取得

English Coins in the British Museum; Veronica J. Smart, Moneyers of the late Anglo-Saxon Coinage 1016-1042, Thesis submitted to the University of Nottingham for the degree of Doctor of Philosophy, October 1981; Do., 'Moneyers of the late Anglo-Saxon coinage 973-1016, in Commentationes de nummis saeculorum IX-XI in Suecia repertis 2 (1968), pp. 191-276 を初めとする関係文献からデー

タを収集し、これからも継続していく。
2. 研究協力者(機関)からのデータ提供
共同研究関係が確立しているノルマン征服以降の貨幣史研究の第一人者である Martin Allen (Senior Assistant Keeper, Fitz William Museum, Cambridge University)が所属する、Fitz William Museum (FWM)の貨幣史部門からのデータの提供と British Museum(以下 BM)での調査によってデータを取得した。これらの研究活動はこれからも継続していく。

3. 現地調査とオークション雑誌(SPINK)

錢貨製造人の研究の難しさは、新しい錢貨が発見されるたびに情報を書き換える必要がでてくることである。しかも新発見貨は市場に出回ること多い。新発見貨については世界的な貨幣オークションである SPINK の詳細なカタログデータにも目を通す必要がある(現在一部はインターネット閲覧可能)。フィッツ・ウィリアム博物館が中心となって作成してネット上に公開しているデータベース Early Medieval Corpus は、本研究にはなくてはならないものであるが、個別発見を対象としていて、退蔵貨(coin hoards)が抜けている。また時代も 1180 年までしかカバーしていない。English Coins in the British Museum は発行時期が古く遺漏が多い。BM や FWM が収蔵しているコインコレクションの調査によって追加していくことが重要となる。錢貨製造人の発見には、こうした地道な錢貨データベースの構築が必要である。鶴島は、ケントに関する 973 年から 1066 年までの 400 枚を超えるコインを対象とした調査でもこれまでの研究で見落とされていた 5 名の貨幣製造人を発見した。以下その例を紹介しよう。

1) データベースもとにしたプロソポグラフィカルな研究

本研究では、証書などの文書史料、年代記や奇跡譚などの叙述史料からも錢貨製造人の「世界」を描いた。事例を一つ紹介しよう。Canterbury の St Augustine 修道院のお抱え作家 Goscelin of St Bertin が書いた *Miracles of St. Augustine*(c. 1090)に現れるカンタベリーの都市民 Æthelred とその息子 Sired は、灰吹法によって銀を精製した後の灰や浮き滓、リサージ、鉍滓、壊れた炉などを購入して再度銀を精錬して利益を得る金銀細工士であった。彼らは Bath で捕まり当時王からの打型購入代に匹敵する 1 ポンドという大金を支払って釈放された(*Acta Sanctorum*, May, vi, p. 402)。その後彼らは、錢貨製造人に上昇した(表の 20 番の Æthelred と図 3 の Sired : White Book of St Augustine's National Archives, E 164/27, fo. 15v)。さらに、ヘンリ 1 世の時の St Augustine 修道院配下の錢貨製造人として

Aegmund(表の 7 番)と Gregory が、証書の証人として記録されている(BL Cotton, Claudius D. X. fol. 175rv)。文書史料と錢貨を付き合わせることで *Æthelred I Sired Æthelred II*(イタリックは世襲)

Aegmund(以下の親子関係は不明)

Gregory Ælferg (1161 年に消滅する修道院錢貨製造場の最後の製造人。教会は製造人を配下に置くことはできたが、製造に関しては必ず王から打型を購入し国王の命令に従わなくてはならなかった。こうした教会などの王管轄以外の製造人を排除していくのがヘンリ 2 世以降の集権化政策である)という St Augustine 修道院配下の錢貨製造人の系譜が再構成された。しかし、M. Allen でも確認していた同修道院の製造人は Ælferg ただ一人であった。古錢学者は錢貨そのものに力点を置きすぎていて文献史料への目配りが十分ではない。本研究は古錢学と文献史学の溝を埋めていく。

2) 協力者との研究協力体制
プロソポグラフィに関しては、この分野での第一人者である Catherine Keats-Rohan と Ann Williams と、記録史料に関しては Domesday Book 研究の最先端にいる David Roffe との情報交換を日常的かつ継続的に行った。銀の量目と品位に関しては、別府大学飯沼賢司教授の協力を得て、鶴島のコレクションから分析を行った。

3) 研究公開
平成 24 年の日本西洋史学会で「長い 11 世紀におけるケントの貨幣製造人」と報告を行った。

現時点での仮説

なぜ銀貨が流通したか。いままでの研究では、銀という材質のもつ価値、流通させようという権力と権威で説明されてきた。しかしそれだけでは十分ではないであろう。本研究の目的に対する直接の結論は、論文「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環海峽世界の『構造』と展開」で述べた。ウェブサイトで公開されているので参照願いたい。

以下、この研究の結果で得た仮説を結論としてこの報告書を閉めたい。マルクスは、『資本論』で X 量の商品 A (相対的価値形態) = Y 量の商品 B (等価形態) > という有名な定式提示した。しかし、安富歩『貨幣の複雑性』(創文社、2000 年)が喝破したように、「両辺が質的差異を持っているのなら、等号を使用するのは」不適當なのである。この異質間の等式は、交換の場における同意によって可能となる。交換は「場の論理」によって規定される。人々は、その場が計算可能で信頼おける人々とモノから集積されていることを信じて、交換に集まったのである。この計算可能性と人々、とくに地域の人々の間の信用の直接的形態である信頼関係が、市場を支えていた。この信頼関係がこの等式には媒介として必要

なのである。しかもこの等式は、「交換された後の事態を前提」にしている、交換までの要した時間や移動コストが組み込まれていない。まさに貨幣は、新古典派経済学的な、合理的行動仮説において単純化された財として設定され、時間は止まったままである。貨幣を静態的（従って永遠の）財として設定し、「歴史的時間 生命」あるいは「止まらない時間 非平均開放系」の中に設定しなかったが故に、命を扱う学問である歴史学の中に取り込むことができなかった。貨幣は命をもっているのである。だからこそ、王権は錢貨を更新した。そして、貨幣は、貨幣の受け手の意思があってはじめて流通の回路が形成された（黒田明伸）。受け手への信頼は生きている貨幣の流通にとってはきわめて重要な要素であった。

長い11世紀のイングランドにおいては、錢貨の製造人は地域社会の有力者であった。それが受け手に貨幣を受容させる原因となったのである。貨幣（具体的には銀の錢貨）は、材質、権威、製造人の信用、受け手の信頼の相互関係によって、複雑系回路の構造のなかに、生きられる時間を流通したのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Hirokazu Tsurushima, 'The moneyers of Kent in the long eleventh century', in David Roffe (ed.), *The English and Their Legacy 900-1200*, Boydell, 2012, pp. 33-59.

鶴島博和「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環海峡世界の『構造』と展開」『史苑』72(2015), pp. 5-108.

〔学会発表〕(計2件)

鶴島博和「長い11世紀(c.973-1135)のイングランドにおける貨幣製造人の世界—ケント地方のミントを対象として—」日本西洋史学会第62大会、個別報告、2012年5月20日

鶴島博和「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環海峡世界の『構造』展開」日本西洋史学会第64大会公開講演、2014年6月1日

〔図書〕(計2件)

鶴島博和『バイユーの綴織を読む：中世のイングランドと環海峡世界』山川出版社、2015年、332pp.

ウェンディ・デイヴィス編(鶴島博和監訳)『ヴァイキングからノルマン人へ』オックスフォードブリテン諸島の歴史3、慶応大学出版会、420pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

該当せず。

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

該当せず。

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴島博和 (TSURUSHIMA, Hirokazu)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号 20188642

(2) 研究分担者

(0)

(3) 連携研究者

(0)